

発達障害のある子どものキャリア発達支援に向けた 家庭教育プログラム

○清野 絵 （国立障害者リハビリテーションセンター 室長）
榎本 容子（国立特別支援教育総合研究所）

1 背景

近年、発達障害のある人の就労問題への関心が高まっている。発達障害のある人の就労選択肢は、一般雇用と障害者雇用があり、障害者雇用で障害特性に即した配慮を受けることができれば、安定して働き続けられることが示唆されている¹⁾。しかし、一般雇用での挫折を経て初めて障害者雇用につながる実態がある。この理由として、特別支援教育体制は整備されてきたが、キャリア発達支援は発達途上にあり、職業準備性の不足や、自己理解が不足したまま、キャリア選択に至る状況が考えられる。また、本人の課題と共に家族との連携に関する課題も指摘されている²⁾。この背景には、職業準備性の土台となる、家庭での生活面の支援の不足や、わが子が障害者雇用を選択することへの親の抵抗感があると考えられる。

これまで、家族との連携は、ペアレントトレーニングという形で、行政的にも、研究的にも取り組まれてきたが、発達障害のある人の就労問題の解決に向けては、こうしたアプローチのみでは十分とは言えない。今後は、家族が、①家庭生活における「今」の学びが「将来」の就労にどうつながるかを理解した上で、②就労準備に向けた学びの機会を充実させたり、③就労する上での本人の障害特性や必要となる配慮を、体験的かつ段階的に理解できたりするよう、本人の支援に関わる教育（学校）と福祉（放課後等デイサービス）が連携し支えていく枠組の構築が必要である。

2 研究目的

本研究は、発達障害のある子どもの就労を見据え、教育や福祉との連携のもとで、学齢期から家庭で取り組めるキャリア発達支援プログラムを開発することを目的とする。

プログラムの開発過程についてはこれまでに報告してきたが³⁾、本報告では、一連の開発が完了したことを受け、その全体を改めて整理し、開発された成果物及び今後の課題について報告する。

3 研究方法

次の手順で教材を作成した。①過去に企業や就労支援機関等に対して実施したヒアリング記録15件の再分析を行い、家庭に期待される事項の抽出を行った。②文献調査を行い、家庭教育の内容及び家庭との連携に関する知見を整理した。③保護者1名が、家庭教育で重視して取り組んできた内容

を把握した。④「保護者」、その子どもである就労中の「発達障害当事者」、当事者の元学級担任である「小学校教諭」、「就労支援者」との意見交換をし、実践的知見を整理した。⑤既存の就労及びキャリア教育に関わる指標（「就労移行支援のためのチェックリスト」（障害者職業総合センター、2007）、「学校段階別に見た職業的（進路）発達課題」（国立教育政策研究所生徒指導研究センター、2002）等）を整理し、「就労を見据え育みたい力」（冊子教材において、就労を見据え重要となるポイントとして提示。以下「ポイント項目」という。）として取りまとめた。また、「自立生活サポートチェック表Ⅰ・Ⅱ」（東京LD親の会、2017・2018）などの家庭教育に関する資料を参考に、「ポイント項目」に基づく発達段階別の家庭での取組内容表を作成した。さらに、これらの家庭での取組を効果的に進めるために、学校や放課後等デイサービスとの連携の在り方についても検討を行った。⑥作成した冊子教材について、保護者2名による評価を行った。評価の視点は、「就労を見据えた家庭教育内容としての妥当性（内容妥当性）」「内容の過不足」「使いやすさ」とし、それらの結果を踏まえて、冊子教材を改良した。⑦地域ニーズを踏まえるため、地域の発達障害のある子どもの保護者が置かれている状況や、家庭と放課後等デイサービス等の関係機関との連携について情報収集した。⑧得られた情報を踏まえ、冊子教材の利用対象者像とコンセプトを明確化し、冊子教材を改良した。⑨家族会に所属する・または所属していた保護者13名及び、放課後等デイサービス2か所に対し、冊子教材の内容に対する意見を得た。併せて、これまでプログラム開発に関与してこなかった保護者1名に内容に対する評価を依頼し、その結果を踏まえて冊子教材を改良した。また、冊子教材を提示する前の導入資料として、リーフレット教材を開発した。⑩就労中の発達障害当事者の保護者のうち、家庭での取組経験がある者213名（自己申告）に対してWEB上での質問紙調査を実施し、リーフレット教材に対する評価を自由記述で得た。⑪家族会に所属する・または所属していた保護者9名及び、放課後等デイサービス3か所への意見を得て、今後のリーフレット教材及び冊子教材を活用した家族支援の在り方の展望を整理した。

調査の実施に当たっては、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の倫理審査部会で承認を得た（2024-53・2024-54）。

4 結果

(1) 開発した冊子教材、リーフレット教材

表1の内容から構成される冊子教材「家庭と学校と放デイで支える自立へのステップ発達障害等のある子どものキャリア発達を促すヒント集」（図1）とリーフレット教材「発達障害等のある子どもの未来を拓く家庭の力～自立への道を一緒に歩もう！～」（図2）を作成した。

表1 開発した冊子教材の概要

視点	内容
対象	<ul style="list-style-type: none"> 働くことができる可能性を持ちつつも、障害特性による生きづらさを抱えている小学校低学年から高校生までの子どもの保護者（母親、父親等）。 ただし、保護者及び子どもの状況が安定していることを利用条件とする。
コンセプト	<ul style="list-style-type: none"> 専門的な知識を持たない保護者であっても、子どもの特性に寄り添いながら、日々の家庭生活でのかわりを工夫したり、より丁寧に取組んだりすることで、子どもの得意なことを中心として、就労に向けた基本的な力を少しずつ、無理のない形で育てていくことができるよう、そのためのヒントを提供できるものを目指した。 全ての内容を一度に取り組みようとするのではなく、本人の興味・関心に合ったものや、得意なものから、1つまたは2つ程度選定し実践することを想定した。
内容	<ul style="list-style-type: none"> お手伝いを題材とした取組：「簡単な調理をする」「掃除をする」「部屋の片付け管理をする」「洗濯をする」「買い物をする」「ごみの分別リサイクルをする」 生活習慣を題材とした取組：「生活で自立を意識する」「時間管理を行う」 家庭でのキャリア発達を促す取組：「自分を見つめる力を育てる」「人とかわかる力を育てる」「計画を立てて取り組む」
おもな配慮点	<ul style="list-style-type: none"> 取組例を、できるだけ簡潔な形で複数示すとともに、その内容が就労に向けてどのように役立つか見通しが持てる形とした。 取組例では、就労を見据え重要となる視点を、「ポイント項目」として示した。 「発達段階別」（小学校〔低・高〕、中学校、高等学校段階）の取組例を示した。 多様な家庭環境に配慮の上、学校や放課後等デイサービスとの連携のポイントを示した。 保護者の「やってみたい」という意欲を促すため、参考となる体験談を示した。 保護者の不安に配慮し、無理のない取組となるよう、表現等に十分な工夫を加えた。

(2) 質問紙調査による教材の評価

調査の結果、リーフレット教材に対する肯定的な意見は137件であり、「子どもに達成感や意欲を持たせる手立てが詳細に書かれており、非常に参考になる」といった意見があった。一方で、否定的な意見に留まる回答も11件あり、「わかっていても現実にはなかなかうまくいかない」と

いった教材活用の難しさや不安も示され、導入時の支援体制の工夫が今後の課題として示唆された。



図1 開発した冊子教材（A4・74頁）の表紙等



図2 開発したリーフレット教材（A4・8頁）の表紙等

5 考察・結論

発達障害のある子どもの就労を見据え、教育や福祉との連携のもと、学齢期から家庭で取り組むための家庭教育プログラムとして冊子とリーフレットを開発した。今後は、本教材が学校や福祉の支援のもと、導入時の負担に配慮しながら、家庭で無理なく活用されることが期待される。

【参考文献】

- 1) 障害者職業総合センター（2017）障害者の就業状況等に関する調査研究，調査研究報告書 137.
- 2) 榎本容子，清野絵，木口恵美子（2018）大学キャリアセンターの発達障害学生に対する就労支援上の困り感とは？－質問紙調査の自由記述及びインタビュー調査結果の分析から－，福祉社会開発研究，10，pp. 33-46.
- 3) 新堀和子，大蔵佐智子，榎本容子，清野絵（2023）家庭と連携した発達障害のある子どものキャリア発達支援の課題と今後の展望：家庭向けキャリア教育の手引きの作成過程から，第31回職業リハビリテーション研究・実践発表会発表論文集，pp. 160-161.